22120149

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – HIGHER LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU SUPÉRIEUR – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL SUPERIOR – PRUEBA 1

Thursday 10 May 2012 (morning)
Jeudi 10 mai 2012 (matin)
Jueves 10 de mayo de 2012 (mañana)

2 hours / 2 heures / 2 horas

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only.
- The maximum mark for this examination paper is *[25 marks]*.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages.
- Le nombre maximum de points pour cette épreuve d'examen est *[25 points]*.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento.
- La puntuación máxima para esta prueba de examen es *[25 puntos]*.

© International Baccalaureate Organization 2012

次の**1**の文章と**2**の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー(解説文)を書きなさい。

1.

昭和四十五年の六月、七月、八月、私は仕事をしようと思って新潟県の山奥の銀山湖畔で暮した。ここは水道も、ガスも、電気もなく、一年の半ば近くが雪に埋もれるので、年賀状が五月に配達されるというような聖域である。その湖畔の林業事務所の小屋の二階にこもり、バターをさかなに焼酎を飲み、夜は石油ランプをともして本を読んだ。（中略）

ここでは私は超一流品と呼べるような水を飲んだ。山の沢の水や、岩清水である。イワナを釣りに山道を歩いていると、よく岩壁があって、はるかな頂上の暗い林から一直線に水が落下してはしゃいでいるのを見る。あの水である。この年は寒冷がいつまでも去ろうとせず、六月になって深山の襞ひだに雪がのこっていたが、その雪洞を覗くと、暗いなかに霧がわき、氷の天井からポトポト水がしたたり落ちている。この水は水晶をとかしたようである。純潔無比の倨傲な大岩壁をしぼって液化したかのようである。これを水筒にうけて頭や額にふりかけ、頭と手を洗い、さてゆるゆると飲みにかかる。いまのいままでブキの葉のあいだに小さな、淡い虹をかけていた水なのである。

ピリピリひきしまり、鋭く輝き、磨きに磨かれ、一滴の暗い芯に澄明さがたたえられている。のどから腹へ急転直下、はらわたのすみずみまでしみこむ。脂肪のよどみや、蛋白の濁りが一瞬に全身から霧消し、一滴の光に化したような気がしてくる。その体をこまめにうごかして、腰から鉈をぬき、崖を木の根にすがって上ったり下ったりしながらそこかしこに顔をだしているヤマワドの芽を集めるのである。宿に持って帰って山の手作りの辛い味噌をつけて食べると、その峻烈なホロにがさが舌を洗ってくれて、どうにも酒が飲めてしかたない。

七月になって雪が消えてしまうと、イワナ釣りにはべつのたのしみが生じた。山道の岩壁のあちらこちらではしゃいでいる岩清水をよくおぼえておいて、どれがいちばんうまいか、どれをひいきにしようかと、考えるのである。いちばん澄んでいそうで、いつも水勢たくましく、量がたっぷりあり、もっとも高いところから長い距離を走ってきたの、そしてできることなら岩肌に淡い虹をかけてくれているの、そういうのを厳選して、なじみの店にした。そうなるといきつけの酒場の椅子のようにかわいくなってしまって、ほかの岩清水が飲めなくなってくる。釣りにいきがけに一杯飲み、今日は釣れそうだと、うれしい予感をもらい、帰りがけに一杯飲んで頭や顔を洗う。そして、やっぱり釣れたよ、とか、てんでダメだったぞ、とか、いま一息ってところだった、などと胸のうちでつぶやくのである。こう親密になってはほかの岩清水がいくらはしゃいでいてもちょっと浮気ができなくなってくる。

七月、八月と夏が進むにつれて岩清水の顔や味や肌ざわりも変っていった。暑くなるにつれて水量がとぼしくなってやせてしまい、霧がわいたり虹がかかったりすることはなくなり、走り方が弱くなる。そして、気のせいか、これまでになかった木や、枯葉や、苔の匂いが、すっかりゆるくなってしまった舌ざわりのなかにとけこんでいるように思えたりした。いわば水は、重くなったのである。無味の味であるべき澄明さのそこかしこの襞に、いままでなかったいくつかの味がひそむようになり、何からきたものであるか、その像が浮かんでくるようになったのである。

村杉小屋主人の佐藤進は、ひとりと
「衰えたぜや」といった。
私が顔を洗いながら「秋になるとまたよくなるんじゃないの」とたずねた。
佐藤進はしばらく考えてから
「いや、やっぱり冬があけたところがいちばんです。何といっても、あれです。あの水には影が射してません。あれを味わった日には……」といって黙った。
まだ岩清水に影が射していない頃、ある日、幽谷（ゆうこく）で釣りをしてから崖をよじのぼり、対岸にあるゼンマイとりの小屋にたちよって水を飲ませてもらった。ゼンマイとりの人は夫婦で深山（みやま）にわけ入り、一日に何十キロとゼンマイをとり、徹夜でゆでてから日に干すのである。この人たちはきっと沢か、岩清水か、わき水のあるところに小屋をかける。そのとき飲んだ水もすばらしいものだった。すみずみまで澄明で、ふくらみがあり、ピリピリひきしまって輝き、私を一滴の光に変えてくれた。
「お礼に」といってポケットにあったチーズを木の根株においたが、何となく、ひどい汚穢（おわい）のような気がして、はずかしさをおぼえた。
九月になってから山をおり、上越線にのりこんだが、その車内で水を飲んでみたところ、ひとくちすすってどうにもがまんできず、コップをおいてしまった。

（開高　健　「飲む」『白い頁』、一九七二年）

2.

しずかな秋

何千万何億のお母さんがあらわれては消える。この地球の闇に
何千万何億の父親が出てきては消える。この太陽の照っている荒地をよぎって。
でたらめのできないかなしみに
きちがいになれない不幸に
人間どもが苦しんでいる。
青い虚空に浮いている地球の上で
一秒二百哩（マイル）でつっ走っている銀河系の中で
どこへゆきつくかわからない虚無の未来へ
泣き、笑い、くるしみ、戦争、悪徳、
微小なくせに
時間と空間を身体いっぱいふくらましている人間共が
深い孤独の果てでしか手を握りあえない人間どもが
光の中でいがみ合い、
花たちに対して内に恥辱をかんじ
花が何も抗弁しないから知らんふり（いばり）をして
図々しくも神みたいな顔をして威張（いばり）っている奴らが
何ともならない虚無の大未来にいそいでいる
コスモスの咲いている垣根をめぐって
偶然のなかにもぐりこみ
そこで地上にはない秩序の道をさがし
見しらぬ小道の曲がり角などで　ふと
一瞬が永遠である景色を
茫然としてながめている
全く意味のない大きすぎる意味を
自分でない自分の自分を
なにもないくせ物質で満（うな）たされている空間を
その充実のおそろしい唸（うな）りを
宇宙がただ一本の花になった夢を
うっかり見てしまった男はもう、この世では使いものにならなくなってしまったのだ。

青のぎらぎらする大空の下で
子供たちの運動会が快適に行われている
しずかな秋だ

（蔵原伸二郎　「しずかな秋」、一九五三年）